

「生命の教育」創始者谷口雅春先生 今月の言葉

## 認めてほめれば子供は伸びる

子供はそれぞれ個性もちがえば天分もちがう

子供を育てて行く上に於て、先ず心得ておかなければならないのは人間は皆一様のものでないことでありま  
す。天分も異えば過去の念の集積も異う。吾々は過去何  
十回何百回と生れ更つてこの世に出て来ているのであつ  
て、その間に色々の体験を積み、色々の過去を持ってい  
るのであります。だから双生児で生れた子供でも、同じ  
環境で、同じ人が同じ食物で同じ教育法で育ててもすつ  
かり性質が異うことがあるのであります。ですから、子

供をよくしようと思う時に、大人の、しかも自分だけの  
尺度でもって判断しすぎて善悪を評価するといけないの  
であります。人間というものは皆個性が異う。個性が異  
うところにそこに価値がある。桜の花と薔薇の花とはど  
ちらが美しいかという、これは評者の好き嫌いで定  
まるので、桜が一層美しいという人もあれば、薔薇が一  
層美しいという人もあります。それを自分だけの好き嫌  
いでもって、「お前桜のように、そんなに一晩で散るよ  
うな淋しい姿じゃいかん。薔薇の花のようにならねばい  
かん」といったところが、それは出来ない事を望むので  
あります。桜は桜でその良さを認め、薔薇は薔薇でその

良さを認めなければならぬのであります。人を教育するには自分が「こう有りたい」という一つの尺度をもつて、その尺度に異うものは皆悪いと考え、お前は悪い悪いという批評を加えて行きますと、その批評の言葉の力によつて、その児童の天分は伸びず、「僕は悪いものだ、劣等児だ」という観念を心に植えられて、ついに折角の天才児も一個の劣等児になってしまうのであります。

ですから、子供にはすべて、自己独特の個性的方法に於て表現する自由を与えなければならぬのであります。

(新編『生命の實相』第47巻129〜131頁)

### 親の言葉は子供の心に強く印象される

今までの教育家のやっておられる教育法を見ますと、大抵は人間のわるいところを見附けまして、それを「ここがわるいから直せ」というふうなことを常に言つて来たのであります。そうして「お前は出来がわるいからよく勉強せよ」こういうような調子で教えて来たのであり

ます。そうするとその子供はどういうふうになつて行くかといひますと、「お前が出来がわるいから」とこう言われると、言葉の力によりまして、「自分は出来がわるい」ということを強く強く心の底に印象させられるのであります。そうして「出来がわるいからやれ、やれ」と言われますと、「私は出来がわるいのだ、やらなくちゃならない」と思ひましても、心の底に、「自分は成績がわるいのである、頭がわるいのである、よく出来ないのである」という強い信念がその子供の潜在意識に強く印象しておりますから、勉強しようと思つても勉強に興味が起らないのであります。それをいやいや「出来ない出来ない」と思ひながら勉強しましても、本当にその勉強が心に這入らない、そのため、いくら勉強をしても、その効果が拳がらないということになるのであります。これが言葉の力であります。(新編『生命の實相』第47巻7〜9頁)

子供を正直にほめましよう

この間も、或る奥さんが尋常六年になるお子さんを伴って来られたのであります。そしていろいろとお子さんのことを私に訴えられる、「この子はとても乱暴で、勉強をしません。今度中学に入るというのに、この分ではとても進めません、こんななまけ者はありません」といわれる。それで私は申しました。「あなた、子供の前でそんな悪口をいうものではありません。この子は悪い子だ悪い子だといったら言葉の力で悪くなつて来るのです。こいつは悪い悪いといっていると誰でも悪くなつてしまう。あなた、よくこのお子さんの顔を御覧なさい。西郷隆盛によく似ているではありませんか。立派な人相をしているではありませんか。このお子さんは偉い人になります。お母さんが悪い悪いというから悪い真似をしていたんだね。あなたはきつと西郷隆盛よりも偉くなるんだよ。明日から勉強をよくしますね」と、私は信念を注ぎ込むような調子でそれだけだったのであります。すると翌日母親が来られて、お蔭様で、すっかりうちの子が変わりましたといつて大変お礼を言われるので

す。これまでは、夜、寝しなに洋服を脱いだら、上着をボイとこつちへ抛げる、ズボンはおつちへボイと抛げるというような抛りっぱなしだった子供が、私に賞められた晩からちゃんと脱いだ着物を始末して、枕頭に丁寧に畳んで積重ねて置くようになりましたし、勉強も落着いてするようにになりましたと申されるのであります。これと同じ日に来られた別のお子さんも、私がたつた三四言ほめただけで大変よくなられて、(中略)勉強も大変よくするようになったのであります。賞めるといふことは実によいことであります。(中略)ところが大抵の人は可愛い者程賞めない。人前で悪くいう、自分の子を悪くいう。謙遜のつもりかも知れないけれど、自分の信頼している親が、自分を悪い悪いといふものだから間違はない、自分は悪い子だと思ひ込んでしまつて、その子供は悪くなつてしまうのであります。誰の前でも、自分の子は正直に賞めればよいのであります。

(新編『生命の真相』第39卷34〜36頁)